

tam tam

2021.7
VOL.

11

P1 【特集】今こそ、過疎を考える

P2 【特集】新過疎法(通称)について
住民意見から計画策定へ

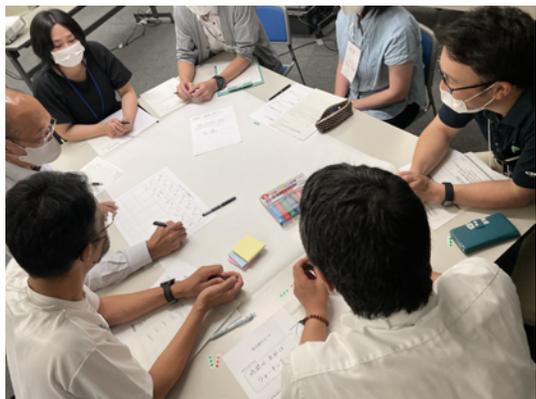
P3 隣の自治協さん「前山地区自治振興会」
丹波市民、学びの窓「市民と協働する図書館」

P4 繋ぐ！市民活動「丹波市俳句協会」
活動事業者紹介「ワタミファーム 丹波農場」

SPECIAL FEATURE

今号の特集

今こそ、過疎を考える



今年4月1日、丹波市青垣地域が国の定めた一定の要件により、「過疎地域」に指定されました。「今さら?」「他にも過疎のところあるよね。」「丹波市全域ではないの?」「過疎って言い方好きじゃないな。」・・・いろんな感想があると思いますが、まず私たちを取り巻く状況はどうでしょうか。

現在指定されている過疎地域は全国1,718ある市町村の内、48%の820市町村あります。ところがこの地域の人口は全国比で9%、面積は全国比60%です。日本では人口減少社会に入っていることに加え、東京一極集中と過疎地域の人口減少が加速しています。地域を維持する担い手不足は深刻化し、公共施設

やインフラの老朽化や統廃合、農地・森林・住まいの管理も問題化するなど、厳しい環境となっています。

日本の将来人口推計では、2040年に1億1,092万人、その20年後には9,284万人(国立社会保障・人口問題研究所が平成29年に出生・死亡中位推計で予測したもの)となっており、日本での人口減少は今後数十年は確実に続きます。また丹波市では、市内全体の人口減少と柏原地域への人口流入が大きく進んでおり、過疎は一部の地域だけの問題ではありません。

今回の特集では「過疎」を取り上げ、この「過疎地域」指定と、私たちがどのように「過疎」に向き合えばいいのかを考えます。



Topics 01 新過疎法 (通称) について

なぜ、青垣地域が過疎地域に指定されたのでしょうか。1970（昭和 45）年以来、4 回にわたり議員立法として過疎対策法が制定されてきました。この 4 月には新たな法律、「過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法」（新過疎法）が制定されました。過疎地域の要件は長中期の人口減少率、高齢者の比率・若者の比率、市町村の財政力などから一定の基準で設けられました。青垣地域の場合、1975 年から 2015 年の 40 年間の人口減少率が 28%以上や、1990 年から 2015 年の 25 年間の人口減少率が 21% 以上など全ての要件に当てはまっています。

新過疎法では地域の持続的発展を掲げ、国や地方公共団体が財政面などの支援をすることにより、人材の確保及び育成、雇用機会の拡充、住民福祉の向上、地域格差の是正、そして美しく風格ある国土の形成を目指しています。また、この法律の名前にある“持続的発展”は SDGs（持続可能な開発目標：Sustainable Development Goals の略。2015 年 9 月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された 2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標。17 のゴール・169 のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓っている。）を意識したもので、SDGs の持続可能性、多様性、包摂性等の考え方は、過疎対策の理論的基礎になります。

	1975年 (人)	1990年 (人)	2015年 (人)	1975-2015年 40年間の人口増減率	1990-2015年 25年間の人口増減率
柏原地域	7,528	9,355	9,870	31.11%	5.51%
氷上地域	18,879	19,096	17,800	-5.72%	-6.79%
青垣地域	8,350	8,047	6,007	-28.06%	-25.35%
春日地域	13,218	13,082	10,903	-17.51%	-16.66%
山南地域	14,376	13,971	11,343	-21.10%	-18.81%
市島地域	10,050	10,108	8,737	-13.06%	-13.56%
丹波市	72,401	73,659	64,660	-10.69%	-12.22%

▲過去 40 年間の人口推移と増減率（出所）総務省統計局「国勢調査」各年

Topics 02 住民意見から計画策定へ

丹波市ではこの過疎地域指定を受けて、計画的に事業を進めるための「過疎地域持続的発展市町村計画」を策定することになりました。青垣地域ではこの計画を策定するにあたり、広く住民の意見を寄せ合うために、テーマ別にワークショップを 3 回開催し、のべ 140 人の方が参加されました。課題や困りごとも多いですが、「住民同士の安心した関係性の中で世代を越えた関わりを持てる。」「自然や風景、歴史文化だけでなく、地域の資源はたくさんある。」など地域の良さを再確認しながら、自分が望む地域の未来像を語り合いました。

第 2 回目の進行役、人・まち・住まい研究所の浅見雅之さんは、「過疎地指定をチャンスと捉え、計画に盛り込むために、地域で困っていることやどのようにになったら良いか、アイデアをドンドン出していきましょう。」と参加者へ声かけされていました。また、「専門家に考えてもらうことも大切。でも市役所にすべてを任せてしまうのは問題。住民にできることもきっと少なくはないはず。」と。

「今さら？」→「あえて今です。」「他にも過疎のとこあるよね。」→「そう、他人事じゃないですよ。」「丹波市全域

ではないの？」→「はい、全域の課題です。」「過疎って言い方好きじゃないな。」→「日本の最先端ですね。」という発想の転換も必要になってくるのではないだろうか。



多くの意見が飛び交ったワークショップ

隣りの 自治協 さんの

TONARI no
JICHIKYO san

前山地区自治振興会

直面する地域情勢に適応した事業の見直し

前山地区自治振興会は、市島地域北西部の前山小学校区に位置し、人口約 1,300 人、約 550 世帯、13 自治会で構成されています。北西は福知山市、西は丹波市青垣・氷上地域に隣接する地域で中央を一級河川前山川が流れています。2014 年 8 月に丹波市を襲った豪雨で甚大な被害を受けた際に、拠点施設のコミュニティセンターが復興支援ボランティアセンター前山地域拠点として活用されました。

振興会は地域の行事として五台山まつり等多くのイベントを行っていました。しかし人口減少と高齢化により行事の負担が大きくなり、振興会主催の地域行事を縮小し、各自治会の行事に注力することになりました。現在、振興会は地域が抱える課題を集約し、解決する場であるとともに、地域活動の支援も行っています。

身近なつながりを大切にした住民のオアシス

振興会が管理する施設、旧前山保育園跡の地域づくり活動センター「オアシスいつせ」では、毎週火・金曜日（祝日休み）と毎月 1 回日曜日の 10 時～15 時 30 分に交流サロンが開催されています。気軽に立ち寄って交流や地域活動ができる憩いの場で、淹れたてのコーヒーや紅茶、軽食などを提供しています。

この取り組みは 2013～2015 年、『兵庫県地域再生拠点等プロジェクト支援事業』を活用して始まりました。最初はボランティアスタッフ 4 名でスタートしましたが、現在は 20 名が参加。オアシスいつせサポーター倶楽部もでき、楽しみながら運営しています。

豪雨災害の時、住民にとって身近なつながりが大事だということをもっと知ることになりました。地域の居場所づくりはなかなか継続が難しい取り組みですが、その被災時の助け合いや絆の記憶が「オアシスいつせ」の事業を支えています。

振興会は、今後もこのような自然に人の集まる、笑顔あふれる場づくりを応援していこうと考えています。



前山コミュニティセンターとオアシスいつせ



コーヒーを飲みながら談笑する住民

丹波市民、学びの窓

市民と協働する図書館

みなさんは図書館をどのように利用されたことがありますか？多くの方は、本を借りる、もしくは勉強する場所として利用しているのではないのでしょうか。近年、図書館は本を借りる場所に留まらず、情報が集まる場所、発信する場所としてその機能が多様化してきています。

情報化社会の進展や紙出版物の減少、読書離れ、指定管理者制度による民間事業者が参入した図書館の登場、住民ニーズの多様化など、図書館にとっての転換期として変化が求められています。特に、「地域を支える知の拠点」として様々な地域連携や新たな利用者サービス、課題解決支援、まち

づくり、空間づくり、電子図書館などの先進的な取り組みが登場しています。

図書館の多様化・多機能化は、図書館が市民と協働することでより一層発揮されます。その一例として丹波市立図書館では、市民グループの活動推進やレファレンス業務の充実などに取り組んでいます。

読み聞かせ団体による「おはなし会」では、本の読み聞かせで、本に親しむとともに、子育て世代の情報交換や、地縁、世代を超えた交流の場となり、社会的つながりを育むことにつながっています。

また、レファレンス業務では参考にする、問い合わせるといった本来のレファ

レンスの目的である資料がある場所としての活用だけでなく、利用者が図書館員と相談することにより、課題解決に必要な情報、新たなアイデアを手に入れられるサービスとして情報提供する機能を果たす取り組みが行われています。

図書館は、図書というモノの提供だけでなく、様々な体験やサービスといったコトの提供によるさらなる機能充実を図るために、住民・地域との協働の大切さが求められている社会教育施設といえます。



市民プラザで実施した古本市



繋ぐ!市民活動

丹波市俳句協会

丹波市には柏原の「田ステ女」を始め、市島の「西山泊雲」、「野村泊月」、青垣の「細見綾子」、春日の「片山桃史」という5名の俳句の先達があります。丹波市俳句協会はこれらの方々の遺徳を偲び、顕彰する活動をしています。他にも丹波市の俳句の振興事業として、秋に「たんば青春俳句祭」を主催し、また小中高校生を対象には学校の協力を得て「出張俳句講座」を実施するなど次世代への俳句文化の継承にも力を入れています。市内の各句会の参加者や個人で構成されており、歴史のある団体でもあります。

2021年3月には俳句ハンドブック「丹波の俳人たち」を作成し、会員や各小学校

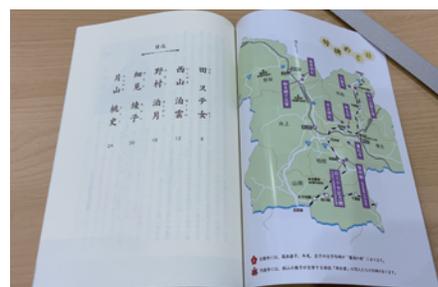
に配布しました。このハンドブックは丹波新聞社の協力のもと、5名の先達の人物紹介やそれぞれの代表的な句碑の写真、地図をまとめています。地図には5名の先達以外にも、正岡子規の一番弟子で美酒「小鼓」を命名した「高浜虚子」、西山泊雲の子「西山小鼓子」の句碑も紹介されています。

「『俳句は生きる力』を生み出すもの。ハンドブックを片手に句碑を巡ったり、ゆかりの地を散策したりして俳句を詠むきっかけにしてほしい。」と会長の由良裕樹さんは語ります。

今後も日々の研鑽を積み、俳句文化の振興を進めていきます。



俳句ハンドブック「丹波の俳人たち」



句碑めぐり地図と5名の俳句の先達



活動事業者紹介

有限会社ワタミファーム 丹波農場

ワタミグループ農業部門の有限会社ワタミファーム丹波農場は、2013年に丹波市市島町で営農を始めました。低地ながら昼夜・夏冬の寒暖差が大きいことを活かし、にんにく、玉ねぎ、大根、レタス、きく芋などを関西圏へ供給しています。

社員が農作業をする中で、地元住民から声をかけられることがあり、その縁で、自治会の役員会に参加、自治活動を知りました。「年に1度はボランティアに参加」という会社方針のもと、草刈りやゴミ拾いに参加するようになりました。そして、2015年頃からは森林整備活動が始まります。

多い時には、2ヶ月に1度、地元住民等が所有する森林の間伐や作業道の整備を住

民と共に進め、年に2回、関西のグループ会社の社員やその家族に声をかけ、自然を身近に感じてもらえる森林整備体験会を開催しています。山の栄養で育ったにんにくやたまねぎは、薪を燃やして乾燥させます。森林を整備することで、適切に水、栄養、空気、エネルギーを回し、循環型社会に貢献することはワタミファームとしてはうってつけの活動です。

現在は感染症対策のため、活動を休止していますが、これからも継続していく予定です。「地元の野菜が一番美味しいので、食べてください。自分たちの健康と共に、地域産業を守ることに繋がります。」と北村誠浩農場長は語ります。



森林整備を進める地域住民と記念撮影



森林からすぐ近くのにんにく畑



丹波市市民活動支援センター

TAMBA CITY CIVIL AND COMMUNITY ACTIVITIES CENTER

〒669-3467 兵庫県丹波市氷上町本郷300 丹波ゆめタウン2階 丹波市民プラザ内

TEL 0795-82-8683 MAIL ccac@tamba-plaza.jp

開館時間 10:00～18:00(会議室は21:30まで) / 休館 毎週月曜日・12月29日～1月3日

<https://www.tamba-plaza.jp/ccac/>

【情報誌へのご意見募集】

「たむたむ」についてみなさんからのご意見、ご要望をお待ちしています。役立つ情報紙と一緒に作っていきましょう。